

平成 19 年度
筑波大学附属
図書館企画展

古地図の世界

世界図とその版木

平成 19 年度 筑波大学附属図書館企画展

古地図の世界

—世界図とその版本—

会期 平成 19 年 10 月 1 日（月）～ 10 月 26 日（金）

会場 筑波大学附属図書館（中央図書館貴重書展示室）

主催 筑波大学附属図書館

凡 例

1. 本書は筑波大学附属図書館企画展「古地図の世界—世界図とその版木—」(会期：平成19年10月1日(月)～10月26日(金))の図録である。
2. 図版等に付される番号は、展示資料の番号と一致する。
3. 都合により一部の展示資料の掲載を割愛した。
4. 旧字体は新字体に改めた。
5. 本書の執筆は、第1部を本学准教授大塚秀明が、それ以外の部分を当館職員篠塚富士男が担当した。

表 紙：重訂万国全図および版木

ご 挨 拶

今年も恒例となっている附属図書館企画展のご案内をする時期となった。今回のテーマは『古地図の世界―世界図とその版木―』である。きっかけは今春、江戸幕末に作成され明治初年に修訂された世界地図の版木が、ほぼ完全な16枚セットで図書館に寄贈されたことにある。点数としては1点であるが、他に類を見ない寄贈である。その価値については今後精査されることと思われる。本企画展は、その寄贈された版木を中心に、本学貴重資料と他大学からも関連資料を借用するなどにより構成したものである。

日本の大学が現在と将来の課題に対応すべく計画と評価を通した「改革」が求められて久しい。附属図書館も大学の諸改革に呼応して、いくつかの改革の試みが進行中であり、その一つが附属図書館の運営とサービスの高次化に向けた研究開発を目的とする研究開発室の設置である。昨年度から本企画展も研究開発室の一活動として実施しているところである。

研究開発室員と附属図書館企画展ワーキンググループ諸氏による昨年度に続く企画展の取り組みを大いにお楽しみいただき、附属図書館の資料と活動へのご理解を深めていただければ幸いである。

さて、図書館の自己点検と評価の基準には、年間利用者数や貸出冊数など様々な指標があるが、なかでも蔵書冊数は端的にその図書館の歴史と規模を示すものとして広く用いられている基準である。これまで本学の新規受入れ図書は図書館の経費で購入するものと、教員が研究費で購入し原則図書館に配架するものから構成されてきたが、ここ数年、後者の受入れ冊数が大幅に減少している。冊子から電子媒体あるいはオンライン情報資源への大きな流れは承知はしているものの、図書館の将来を考えるとゆゆしき事態で、近年の蔵書構成の偏りが続くと将来今日の水準を上回る（少なくとも下回らない）図書館サービスが確保できるか大いに危惧している。

そこでこの機会を借りて、教員や名誉教授、卒業生・留学生を含めた関係者に対し図書寄贈のお願いを申しあげたい。冊数の多寡は問題ではなく、独自の観点から収集された図書は図書館が購入する図書とは違うであろうし、その違いが図書館の質の向上につながることを確信する。古今東西の知識資源を収集提供し、それが利用されることで新たな知識が再生産される図書館機能の基本を維持発展させるために、各位のご支援・ご協力をお願いする次第である。

平成19年10月

筑波大学附属図書館長 植松貞夫

資料一覧



番号	資料名（所蔵）	番号	資料名（所蔵）
1-1	首楞嚴義疏注経（ハ 320-24）	2-9	蝦夷国全図（ネ 040-95）
1-2	訳鍵（チ 700-19）	2-10	蝦夷國境輿地全図（ネ 040-94）
1-3	哲学字彙（ロ 120-19）	2-11	重訂万国全図（ネ 040-27）
1-4	李卓吾先生批評西游記（923.5-G54）	2-12	輿地誌略（ネ 310-52）
1-5	三世相明治雜書万曆大成（個人蔵）	2-13	重訂万国全図版木（290.38- J98）
1-6	仏祖統紀（ハ 360-131）	3-1	拾芥抄（イ 200-9）
1-7	南瞻部洲万国掌菓之図（ネ 040-348）	3-2	唐土訓蒙図彙（2-4 再掲）（ネ 350-8）
1-8	大明京省九辺外国府州県路程図（ネ 040-287）	3-3	海東諸国紀（ネ 310-27）
1-9	職方外紀（叢書集成）（イ 350-333-316）	3-4	The history of Japan（210-Ka15）
1-10	三才図会（イ 290-48）	3-5	日本図（ネ 040-603）
1-11	大清輿地全図（ネ 040-248）	3-6	日本鹿子（ネ 310-15）
1-12	漢代画像の研究（イ 300-559）	3-7	大日本海岸全図（ネ 040-42）
2-1	中華古地図珍品選集（292.2-C62）	3-8	官板実測日本地図（ネ 040-652,661）
2-2	増補華夷通商考（ヒ 620-75）	4-1	北蝦夷図説（ネ 334-4）
2-3	和漢三才図会（イ 280-20）	4-2	東韃地方紀行（ネ 334-3）
2-4	唐土訓蒙図彙（ネ 350-8）	4-3	訂正増訳采覧異言（ネ 900-4）
2-5	地球万国山海輿地全図説（ネ 040-377）	4-4	海国図志弥利堅国図（ネ 040-294）
2-6	地球全図略説（ネ 900-26）	4-5	海国図志墨利加洲部（ネ 030-19）
2-7	新製地球万国図説（ネ 900-27）	4-6	儒門語要版木（個人蔵）
2-8	新製輿地全図（ネ 040-384）	4-7	儒門語要（ロ 880-110）



目次

ご挨拶 植松貞夫	3
資料一覧	4
目次	5
導入部 今見ている地図はホンモノですか？	6
第1部 三国世界観とその変貌	8
1 「世界」とはなにか	
2 仏教系世界図	
3 中国系世界図	
第2部 日本における世界認識	18
1 「世界の中の日本」の把握	
2 重訂万国全図とその版木	
第3部 日本？ 日本！	26
第4部 古地図ア・ラ・カルト	32

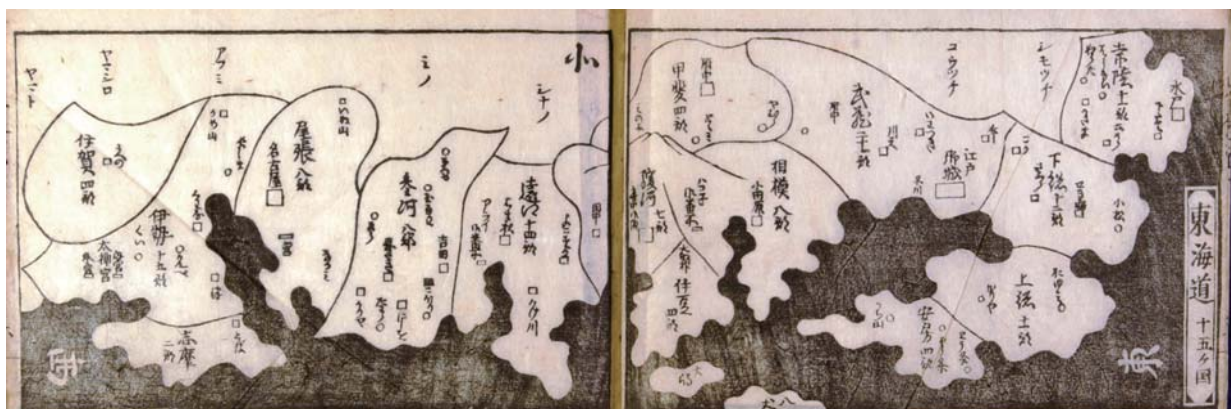
導入部 今見ている地図はホンモノですか？



初めて行く場所の下調べ、観光、ドライブなど、日常生活で地図を利用する機会は多い。小学校の授業で真新しい地図帳を手にしたときの、わくわくするような好奇心を刺激される感覚は、多くの方々にとって懐かしいものであろう。近年では紙の地図（一枚もの、地図帳）のほかにも、インターネットで配信される地図や、携帯電話やカーナビゲーションで利用できる地図など、デジタル化された地図の利用が一般化しており、Google Earthのように、衛星写真や航空写真を利用して地球儀を見るような感覚で地球そのものを手軽に眺めることができるソフトも人気を博している。現代は、いわば空気のように身の回りに地図があふれている時代になっている。

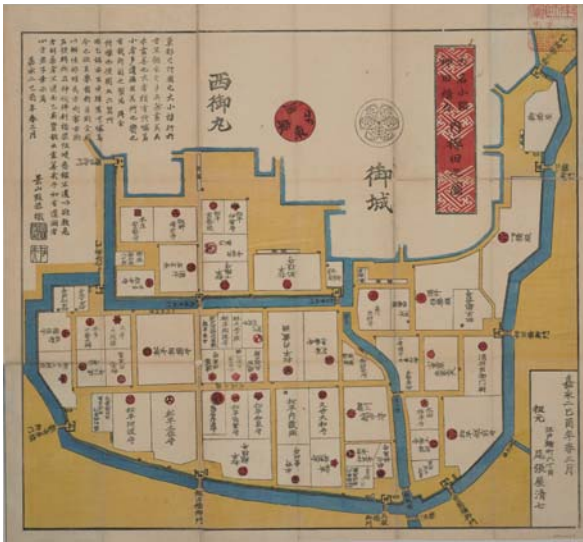
辞書で「地図」という言葉を引くと、「地球表面の一部または全部の状態を、一定の割合で縮め、文字・記号を用いて平面上に表したもの」（三省堂『大辞林』）と定義されている。本企画展では、近代的測量ならびに印刷術普及以前に作成された地図を「古地図」と呼ぶこととするが、このような古地図においては、たとえば江戸図のように身近なところは身体感覚に正直に、日本図や世界図のように身体感覚として把握しきれないところは一定の世界把握・思想的背景のもとに地図が作成されている。こうした地図の作成に伴う「常識」は現代の日本の地図の「常識」とは異なるものであるが、「地図とは何か、何をあらわしているのか」という問題を改めて考えてみると、地図とは「それが作成された時代・環境における世界観・世界認識を示すもの」であるということができる。また、これは古地図だけに限定されることではないので、現代においても地図作成の目的・視点を変えれば、ふだん見慣れた地図とはまったく違う地図が出来上がってくる。

今見ている地図はホンモノですか？



▲東海道十五ヶ国（『日本鹿子』より） 石川流宣画 佐藤四郎右衛門ほか 元禄4（1691）年

「尾張屋版江戸切絵図」より



切絵図とは江戸をいくつかの区画に分けて描いた区分地図である。切絵図は一枚ごとに縮尺も方位もバラバラで一定ではないが、図としての正確性よりも地域としてのまとまりが考慮されており、徒歩で移動する際の体感距離が把握しやすい。また、記号や色分けによって何が描かれているかを示しており、表札を出していなかった武家屋敷の住宅地図や江戸のガイドマップの役割も果たしていた。

◀御江戸大名小路絵図 尾張屋清七 嘉永2(1849)年

*大名屋敷が立ち並ぶ大名小路の図。家紋が描かれているのは大名の上屋敷であることを表し、名前の書き方でその屋敷の表門の位置がわかるようになっている。呉服橋門内に北町奉行所(東京駅八重洲北口付近)、数寄屋橋門内に南町奉行所(有楽町駅中央口付近)がある。



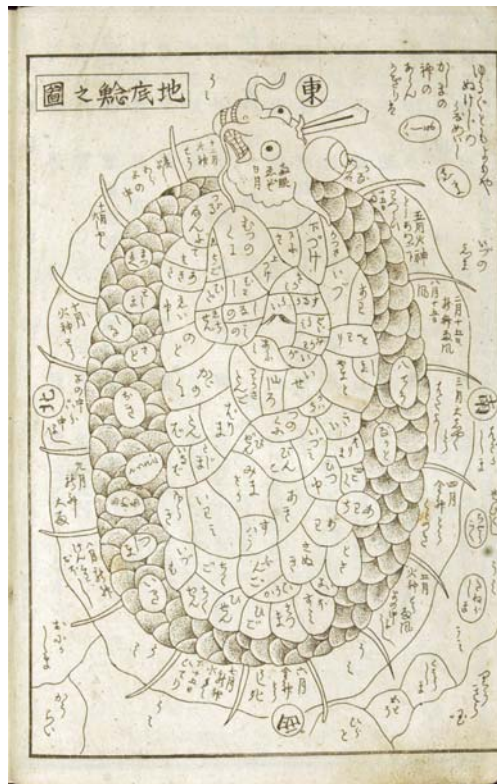
▲芝高輪辺絵図 尾張屋清七 嘉永3(1850)年



▲文久元(1861)年

*版が違うので描かれているもの(情報)が更新されている。

(どのくらい違うかわかりますか？ 左の図の刊行後の嘉永6(1853)年にペリーが黒船で浦賀に来航しました)



◀地底鯨之図

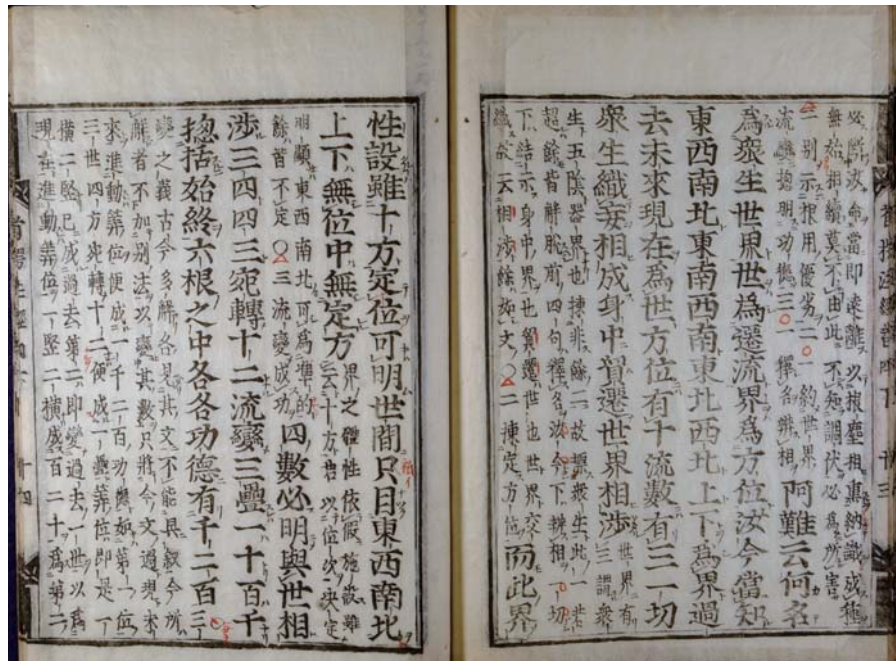
(『三世相明治維新萬曆大成』より)

*鯨が日本を囲んでおり右上に「鹿島の要石」の歌がある。

第1部 三国世界観とその変貌



日本における世界図は①仏教系世界図、②中国系世界図、③ヨーロッパ系世界図の三つに大きく分けられる。本展示では前の二者を第1部に、ヨーロッパ系世界図を第2部に分ける。世界図と言っても所謂「世界」が示すものが異なるからである。先ず「世界」という言葉について、その語誌をたどってみる。



1-1 ^{しゅりやうごん}首楞嚴義疏注経 豊雪齋道伴 寛永9（1632）年

*『首楞嚴』とは梵語「シューランガマ」の音訳で、意味は「勇者として進み行く者」、すなわち菩薩のあり方を意味する。

1 「世界」とはなにか

「世界」は梵語「ロカダートウ」の訳語として中国で作られ日本に伝わった仏教語である。仏教経典の一つ『法華経』の序品に「爾時佛放眉間白毫相光照東方万八千世界靡不周遍」（その時仏は眉間の毛の環から一条の光を放つと、光は一万八千の世界に拡がり遍く行き渡らないところはなかった）とあり「一万八千世界」と使われている。また中国で作られた経典といわれている『首楞嚴経』では「世界」の意を「東、西、南、北、東南、西南、東北、西北、上、下を界となし、過去、未来、現在を世となすなり」と定義している。

こうした仏教語が一般語彙となり『竹取物語』に「世界の男、あてなるも賤しきも、いかで此のかぐや姫を得てしがな、見てしがな」とあるように「世間」の意で使われた。求婚する男性に、かぐや姫が出す難題の一つに「龍の頸の玉」があり、そこには「この国になき、天竺・唐の物にもあらず」と日本と天竺と中国の三国が並べられている。これが古代の日本人の「世界」の捉え方で、「三国世界観」といわれている。『今昔物語集』でも天竺部・震旦部・本朝部と分けられ、このような世界観は16世紀ヨーロッパから日本に布教に来たキリスト教宣教師たちからは、奇異の目で見られ、日本人の世界観について「全世界はシナとインドと日本から成立ち、それ以外はないと思っている」という日本報告もされている。

2 仏教系世界図

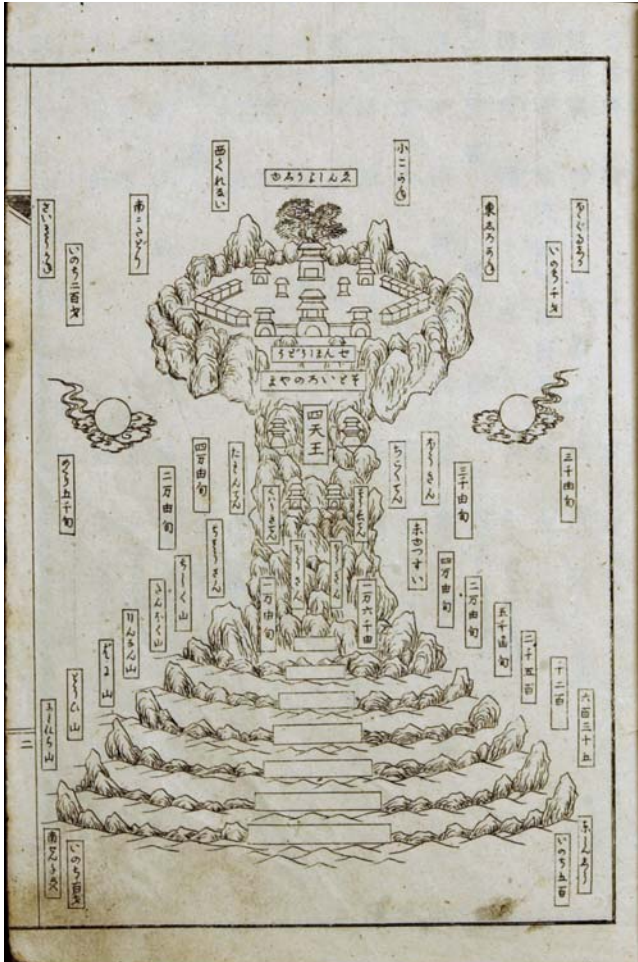
仏教では、大地の中央に須弥山がそびえ、日月はその頂上をめぐり、須弥山を囲み七重の山地があり、その外側に四つの大陸を有する大海原が広がる。四大洲のうち須弥山の南方にあるものだけが現実の陸地で、梵語「ジャンブ・ドゥヴィーパ」という。中国では、前半を「瞻部」と音訳し、陸地の意の「洲」を添え「南瞻部洲」と訳した。須弥山の東の東勝身洲、西の西牛賀洲、北の北俱盧洲とあわせ四大洲を形成した。こうした仏教世界は古くから図に描かれた。宋代には志磐『仏祖統紀』があり、明代の『西遊記』の冒頭には四大洲の説明がある。東勝神洲にある花果山から南瞻部洲の人間世界にきて孫悟空の名前を授かる話はよく知られている。



1-4 李卓吾先生批評西游記 吳承恩〔原著〕李贄評 中州書畫社 1983年

＊「東勝身洲」を「東勝神洲」に、「南瞻部洲」を「南瞻部洲」にするなど細部にこだわらない用字が見られる。

日本には、中国で作成された仏教系世界図が将来され模写された記録はあるものの現存する模写絵図はやや時代が下がる。法隆寺が蔵する『五天竺図』という絵図がわが国最古の仏教系世界図といわれている。製作年と思われる貞治3（1364）年と一緒に収蔵されている品から明らかになった。図にはインドを連想させる逆三角形の大陸が描かれ、大陸の東部には中国を示す「晨旦」がある。この法隆寺の図を簡略化した図が明代の書籍には「南瞻部洲図」と題して収められ、「南瞻部洲」が「世界」の代名詞として使われていることがうかがえる。



1-5 三世相明治雑書万曆大成 須原屋新兵衛ほか

*前世・現世・来世の因縁に中国の五行説を交えて吉凶禍福を説く占いの本。江戸時代中期から家庭百科全書として民間に流布し、明治になっても広く使われた。



1-6 仏祖統紀（釈）志磐撰（咸淳7（1271）年成立）

*須弥山の左右に日と月と星が描かれ、大地は金・水・風の3層により支えられている。

本展示には『南瞻部洲万国掌菓之図』を挙げるが、これはヨーロッパ系世界図の伝来以降に作成された新型の仏教系世界図である。インドを示す南瞻部洲、その東部に中国、その東側の海上には日本が描かれ、伝統的な「三国世界観」を反映させていると同時に、左上部にはヨーロッパ、日本の南には南アメリカが小さく配されており新知識も取り入れていることがわかる。とはいえ日本と南アメリカの間には「小人国」「毛人国」「川心国」（「川心」は「穿胸」に同じ）があり、精神世界の絵図である。この三国（いま一つ加えれば「女人国」）は中国古代の地理書である『山海経』に出てくる想像上の国である。東アジアで作成される世界図はこうした国からの決別から近代化が始まったといえるであろう。



1-7 南瞻部洲万国掌菓之図（積）浪華子製図并撰 文台軒宇平 宝永7（1710）年



▲渦巻きの拡大写真

＊陸地の中央には渦巻き状の無熱惱池があり、牛・象・馬・獅子の四種類の動物の口からガンジス河・インダス川・オクサス川・タリム河と推定される四つの大河が流れ出ている様子を描く。



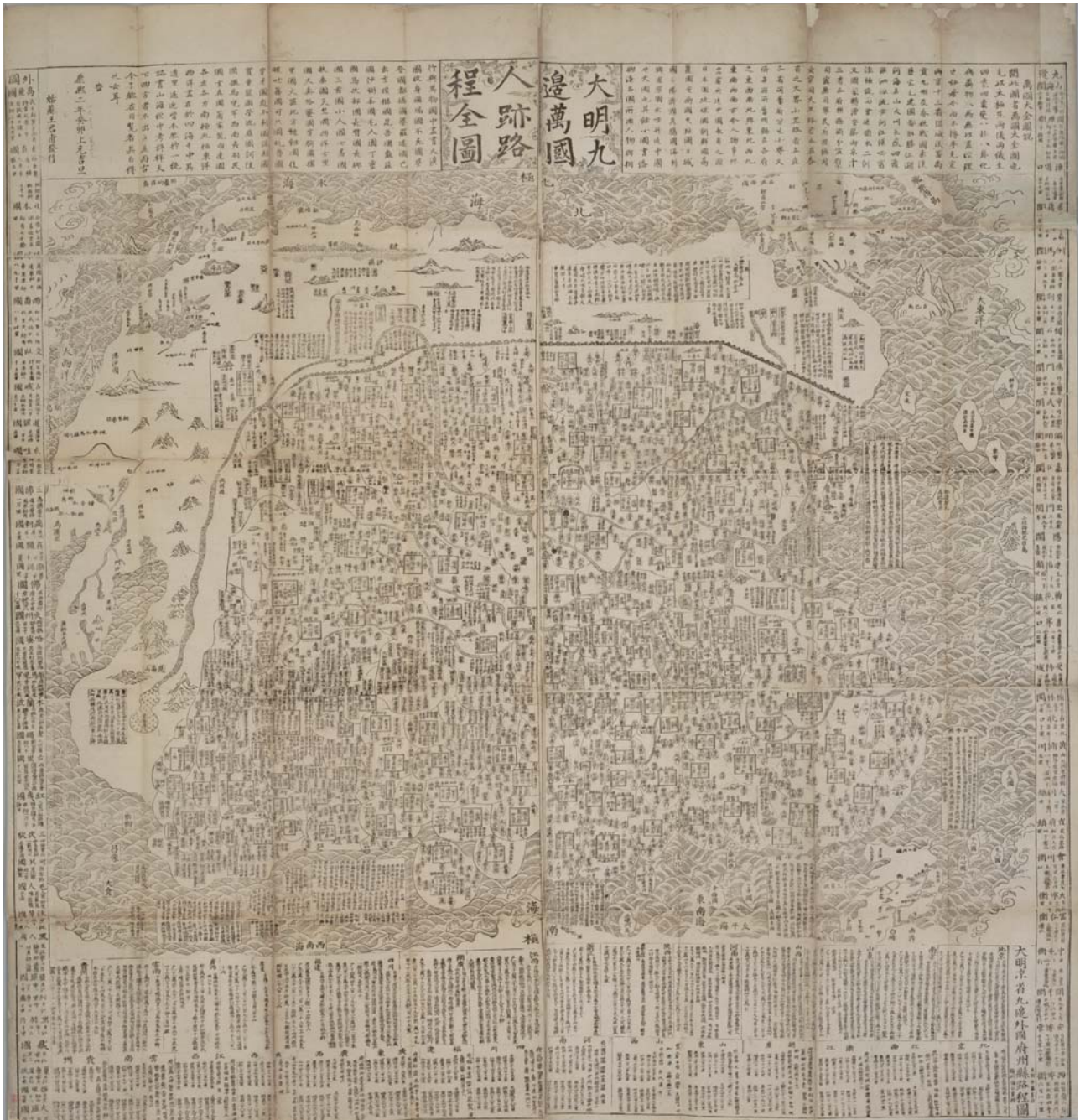
▲日本の南のアメリカの拡大写真

＊亜墨（墨）利加、伯西兒、孛露、智勒など、それぞれアメリカ、ブラジル、ペルー、チリなどの国名と読める。

3 中国系世界図

中国では、漢民族の住む国が中央にあり、文化の低い周辺諸国を蛮夷の地とみなしてきた。真ん中にあるので「中つ国」、四方には「東夷、西戎、南蛮、北狄」の国があると考えてきた。中華の国と蛮夷の地とを合わせた世界図は華夷図と呼ばれ唐の賈耽『海内華夷図』が記録に残されている。近年は『混一疆理歴代国都之図』というモンゴル帝国が生んだ世界図が注目されている。

本展示ではヨーロッパ系世界図の伝来以降に作成され、日本で翻刻された2点を挙げる。全土が15省であった明代と18省になった清代の違いはあるが、中央部に中国があり、周辺部に西洋地理学の知識が活かされている点は共通している。



1-8 大明京省九边外国府州県路程図（大明九边万国入跡路程全図） 梅村弥白

* 曹君義の『大明九边万国入跡路程全図』崇禎 16(1644) 年を姑蘇（蘇州）王君甫が『天下九边万国入跡路程全図』と改め康熙 2(1663) 年に出版したものを、日本の梅村弥白が元禄・宝永年間 (1688 - 1719) に再刻したもののと思われる。



1-9 職方外紀（叢書集成） 天啓3(1623) 年

アレーニ（イタリア人宣教師）

*マテオ＝リッチの『坤輿万国全図』を増補した世界地理書。

▲ 1-8 の左上部のヨーロッパ図



1-10 三才図会 王圻纂修 男思義校正 万曆 37 (1609) 年



1-11 大清輿地全圖 陳松亭図 青苔園誌 仙胤校 天保6(1835)年

*「道光15(1835)年乙未歳以呉門陳松亭図写之」とある。

『日本古地図大成』では『朝異一覽』を書名にする。地図は同版である。

「輿」とは、人が数人で担ぐ「こし」。転じて万物をのせるもの、すなわち大地をさす。

「輿地」「坤輿」も天に対する大地の意である。



▶題箋

世界が円形に描かれ、中央には大きく中国があり、東に朝鮮・琉球・日本が、西にインドが配された「三国世界観」を描くと同時に、周囲にはユロシア、ジャガタラ、シャム、トルコ、さらにオランダなどの新しい知識も伝えている。とはいえ絵図に記されているのは古今の人物事跡が多く、また新知識だけでなく『山海経』の国々「女人国」「穿胸国」「小人国」「長人国」などが見える。



▲予讓裁衣地の部分の拡大写真

山東省には「孔子廟今存ス」「十哲各古跡」とあり、孟嘗君、東方朔がこの地方の出身であることを示す。またその北の保定府の南西には「豫讓裁衣地」とあり、『史記・刺客列伝』にある予讓の物語がこの場所で繰り広げられたことを示す。



1-12 武梁石室画像より（『漢代画像の研究』長広敏雄 中央公論美術出版 1965）

予讓は中国戦国時代の晋の義士。晋の智伯に仕えて尊寵されたが、智伯が趙襄子に殺されると「士は己れを知るもののために死ぬものだ」と復讐の誓いを立て、名を変えて刑人となり厠で襄子を刺そうとする。襄子はこれを知り捕らえるが、予讓を主人を思う義士として許した。予讓は身に漆を塗って物乞いの姿となり襄子の通る橋の下で再度殺害を狙ったが、馬が驚き捕らえられ、今度は許されず、襄子の衣を請い剣を抜きこれを刺し智伯に報ずるなりと言い自害した。



1 「世界の中の日本」の把握

明治以前の日本における世界図を世界観・世界認識の観点からみると、①仏教系世界図、②中国系世界図、③ヨーロッパ系（マテオ＝リッチ系・蘭学系）世界図の3種に大別することができる。これらの世界図は、①から②、②から③というような形で次々に新しい系統の図におきかわっていった、というわけではなく、庶民向けの通俗図などでは江戸の幕末に至るまでこれら3系統の図が並存していた。それは、江戸庶民の世界認識のあり方を示すものでもあるが、また同時に、地図に必ずしも正確性だけを求めたのではなく、伝統の重視や、美しさ、分かりやすさ、楽しさといった要素を求めたことの表れでもあった。

しかし、「世界の中の日本」という意識やその把握という観点からみると、大きな画期となったのは、近世初頭の『坤輿万国全図』の伝来であった。この『坤輿万国全図』は、地球の形を球体とみる考え方を示すとともに、世界は新大陸を含む五大州から成るという広大な世界像を表現しており、三国世界観からの脱却という形で日本人の世界認識にきわめて大きな影響を与えた。

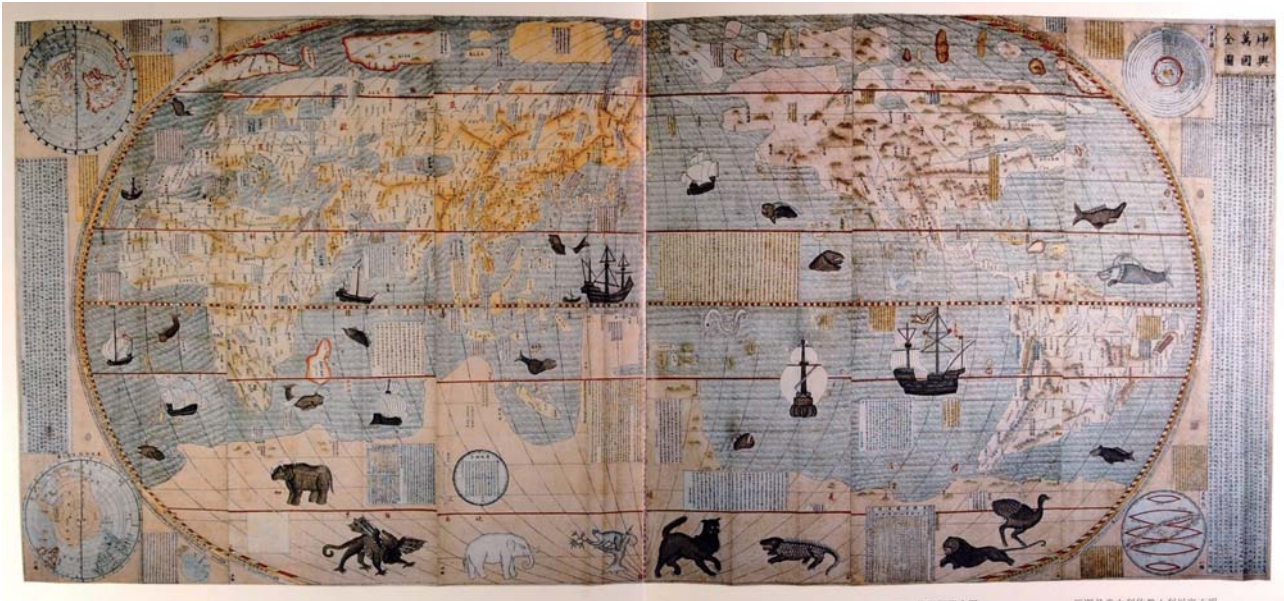
2 重訂万国全図とその版本

江戸幕府は寛永16（1639）年にポルトガル船の入港を禁止し、いわゆる鎖国体制が完成した。しかし、80年後の享保5（1720）年には徳川吉宗によって禁書が緩和され、これも一つの要因となって江戸時代後半には蘭学が盛んになった。そして、オランダ語を習得することで、漢訳ではなく原書から直接、暦学・天文学・地理学などのヨーロッパの実学の知識を得ることができるようになり、日本人の世界認識は大きく進展した。

一方、18世紀後半にはロシアが北太平洋から南下して日本近海にも出沒したが、これに刺激を受けた江戸幕府は北方への意識が強まり、蝦夷地の探検や北方の地図の作成が行われた。また、幕府の事業として、伊能忠敬の日本図作成のための全国測量や幕府天文方の高橋景保の世界図編纂もはじまり、文化7（1810）年には高橋景保による『新訂万国全図』が完成した。この『新訂万国全図』は、文化5（1808）年の間宮林蔵による間宮海峡の発見の成果をも取り入れているが、これは同時期のヨーロッパの地図に先駆けたものであり、当時の世界においても屈指の地図であった。

『重訂万国全図』は、この『新訂万国全図』を安政2（1855）年に天文方山路諧孝が改訂したものであるが、この安政2年版『重訂万国全図』は、明治4（1871）年にさらに大学南校によって改訂されており、本図は幕末から明治初頭にかけての我が国を代表する世界図であったといえる。

本企画展では、この明治4年版『重訂万国全図』およびその版本を出展している。この版本は今春当館の所蔵に帰したものであり、従来ほとんどその存在に言及されたことはないが、今回の調査で埋め木があることも発見されるなど、今後さらに詳細な調査研究を行う必要があるたいへん貴重なものである。



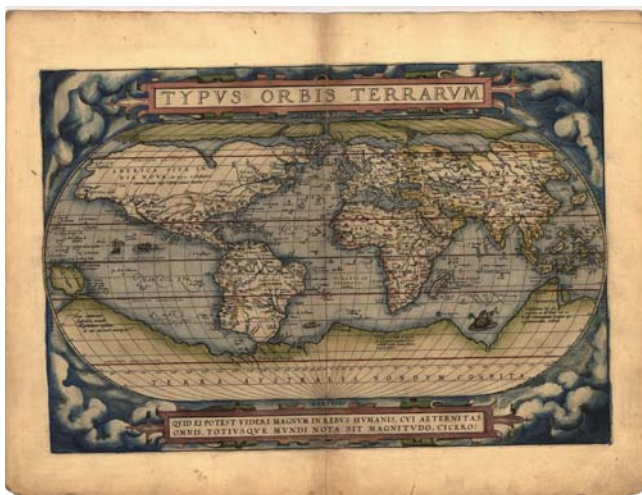
2-1 坤輿万国全図 利瑪竇 南京博物院蔵 (『中華古地図珍品選集』より 哈爾濱地図出版社 1998)

坤輿万国全図

イタリア人の宣教師マテオ＝リッチ（利瑪竇、1552～1610）により、明末の万暦30(1602)年に北京で刊行された漢訳世界図。中華世界観に基づく世界像に対して、実際の見聞や天体観測・航海・測量などの技術的裏づけに基づく宣教師（西洋人）の地理知識・世界認識は、中国の知識層に大きな衝撃を与えた。また、地名を「亜細亜」「欧羅巴」等の漢字で表記しており、中国や日本におけるその後の地名表記に大きな影響を与えた。太平洋を中心に行っていることも画期的。

本図の下（南）の方にある大陸は南極ではなく「未知の南方大陸」（テラ・オーストラリス・インコグニタ）であり、ヨーロッパではマゼランにちなみ Magallanica と呼ばれていた。マテオ＝リッチはこれに「墨瓦臘泥加」という漢字をあて、日本では「メガラニカ」と呼称されて、19世紀にその存在が否定されるまで地図に記載されている。

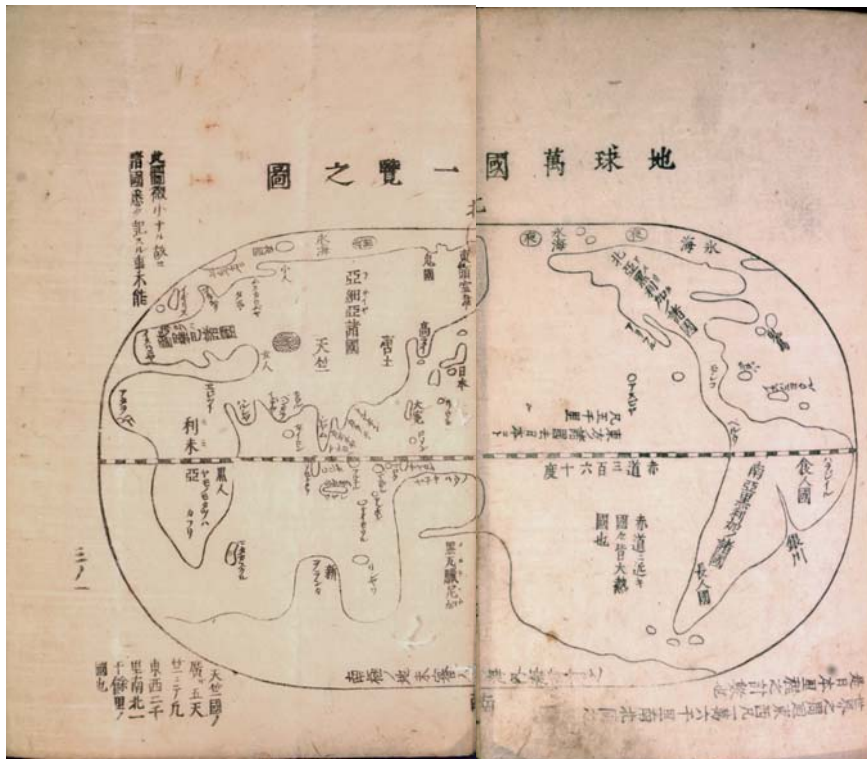
本図は16世紀末にヨーロッパで刊行された大航海時代の成果を取り込んだ世界図等をもとにしており、1570年刊行のオルテリウス、1587年のメルカトル、1590年のプランシウスの世界図などが参考にされたものといわれている。



(参考) A.Ortelius : Theatrum Orbis Terrarum, 1570

(オルテリウス『世界の舞台』) アメリカ議会図書館蔵

『坤輿万国全図』が漢文で書かれていたため、日本では著者が西洋人であることに気づかず、中国の先進文化を取り入れる形で慶長8（1603）年から慶長11（1606）年の間に伝来したといわれている。本図は日本においても大きな影響を持ち、様々な形でこれ以後の地図に取り入れられている。



2-2 地球万国一覽之図

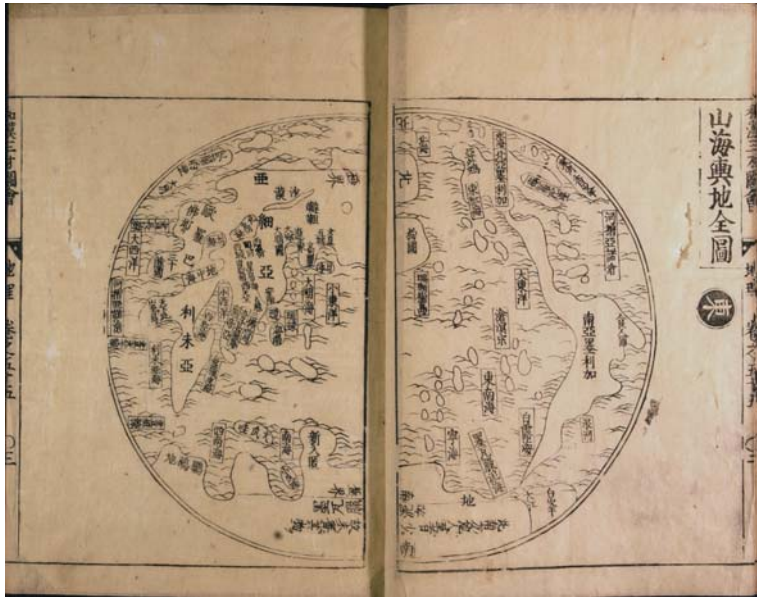
（『増補華夷通商考』より 西川如見 梅村弥右衛門ほか 宝永5（1708）年
世界図の形がわかるように2枚の画像を合成したもの）

* 西川如見は長崎在住という地の利を生かして海外に関する情報を集め、天文・地理学関係の多くの著作を残した。『華夷通商考』は日本人の手による世界地理書として重要なもの。



（参考）外蕃容貌図画 田川春道 紙屋徳八ほか 安政2（1855）年

* 図は西川如見が享保5（1720）年に出版した諸国人物図である『四十二国人物図説』のものと同数以上は同じであるが、説明文は幕末洋学の所産によるものと言われている。



2-3 山海輿地全図（『和漢三才図会』より
寺島良安 大野木市兵衛ほか
正徳5（1715）年）
*本図は明の『三才図会』（1607年）
から転載されたリッチ系の楕円図（卵形世界図）。

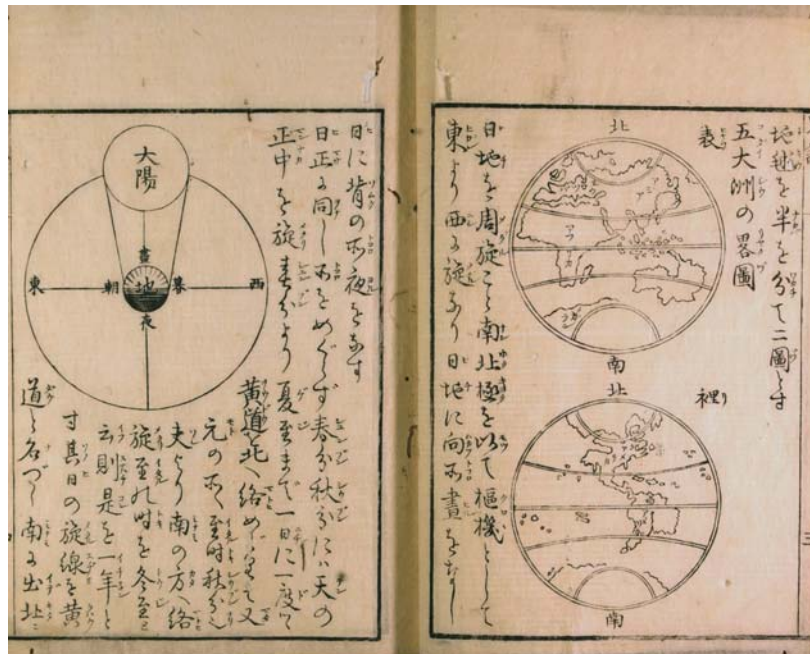


2-4 山川輿地全図（『唐土訓蒙図彙』より
平住専菴 河内屋太助ほか 享和2（1802）年）
*本図は明の『方輿勝略』（1612年）から転載
されたと考えられるリッチ系東西両半球図。



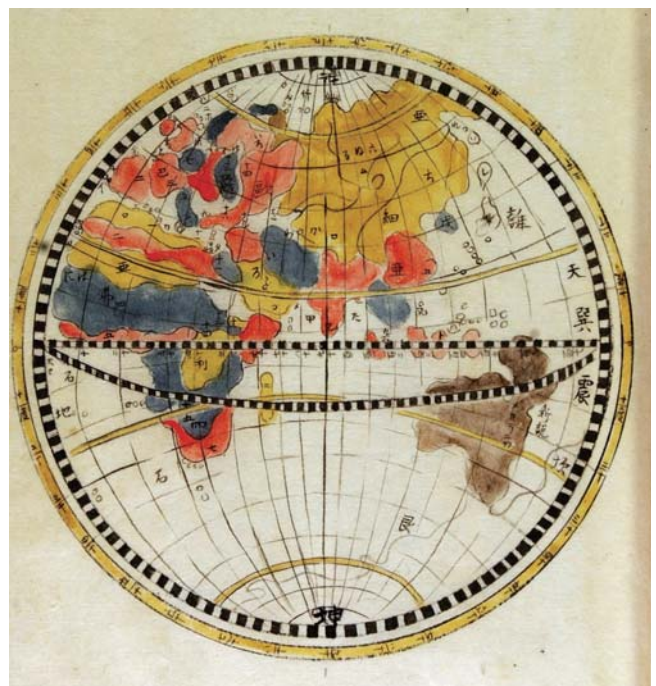
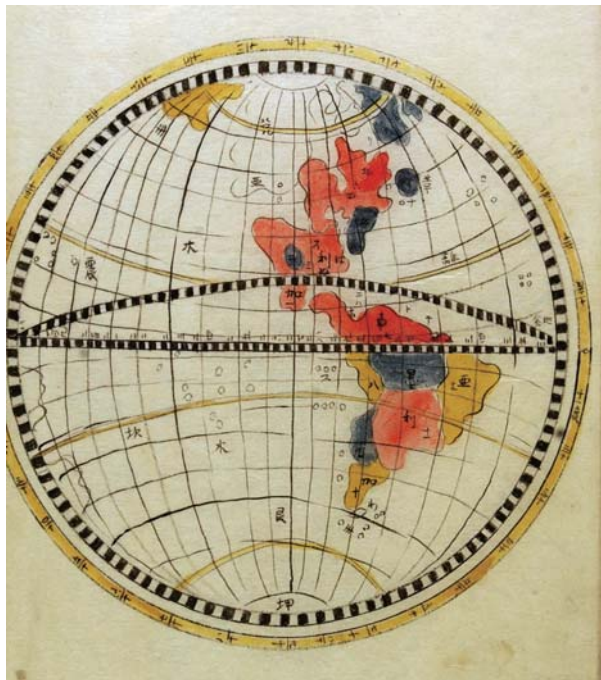
2-5 地球万国山海輿地全図説（新製輿地全図）
長久保赤水述 田謙校閲
天保15（1844）年
*本図は天明5（1785）年ころ成立した長
久保赤水の『地球万国山海輿地全図説』（基
本的にリッチ図に依拠）を再刻したもの。

18世紀後半からの蘭学の興隆にともない、リッチ系の世界図にかわって、より新しいヨーロッパ系の世界図や地理書が日本にもたらされ、リッチ系の卵形世界図から東西両半球図へと世界図の表現方法も変化していく。蘭学者の主導により作成されてきたこうした蘭学系世界図の進展は、ロシアの南下政策に対する北方への関心ともあいまって、やがて幕府による世界図作成の事業につながっていった。



2-6 地球全図略説 司馬江漢 寛政5(1793)年

*本書は寛政4(1792)年に司馬江漢が出した『地球図』(銅版印刷)の説明書として著されたもので、地図と地理書を分離して一組としている。



2-7 新製地球万国図説 桂川甫周訳 大槻玄沢校

*ブラウの万国輿地全図 (Joan Blau: Nova Totius Terrarum orbis Tabula, 1639) を訳したもので伝本は少ない。本書は写本である。なお、このブラウの図は新井白石が宝永6(1709)年にイタリア人の宣教師シドッチと対談したときに利用したものといわれ、白石はこの対談で得た知識をもとに『西洋紀聞』と『采覧異言』を著した。

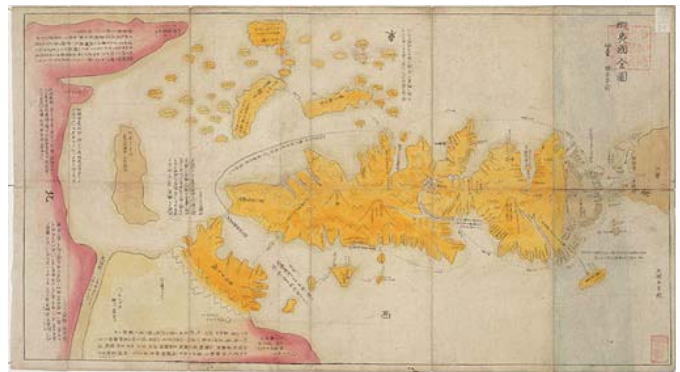


2-8 新製輿地全図 箕作省吾 弘化元（1844）年

* 1835年に刊行されたフランス版世界地図をもとに、高橋景保の『新訂万国全図』（文化7（1810）年完成）の図形を踏襲して作図したもの。本図は、植民地支配をカタカナの記号で示している点に特色がある。

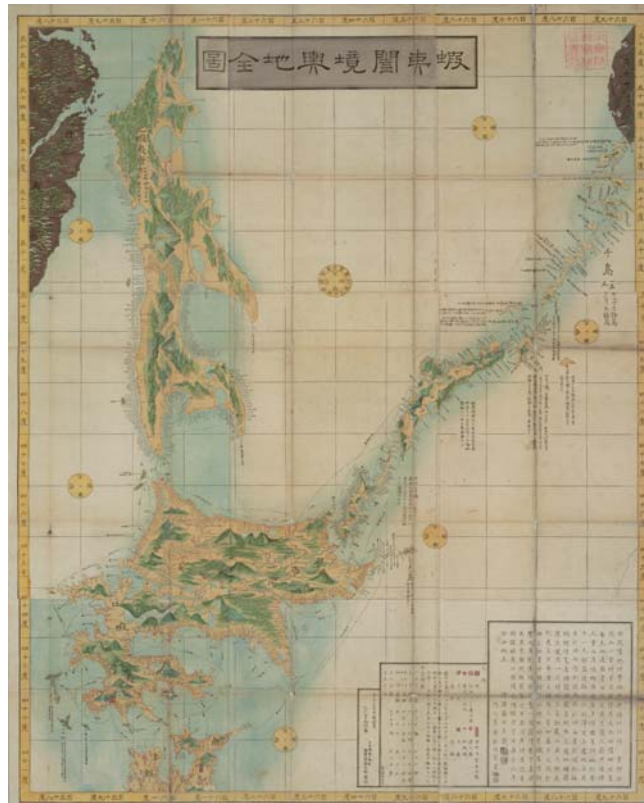


（参考）坤輿図識・坤輿図識補 箕作省吾
弘化2～3（1845～46）年
* 幕末から明治維新にかけて最も広く流布した世界地理書の一つ。

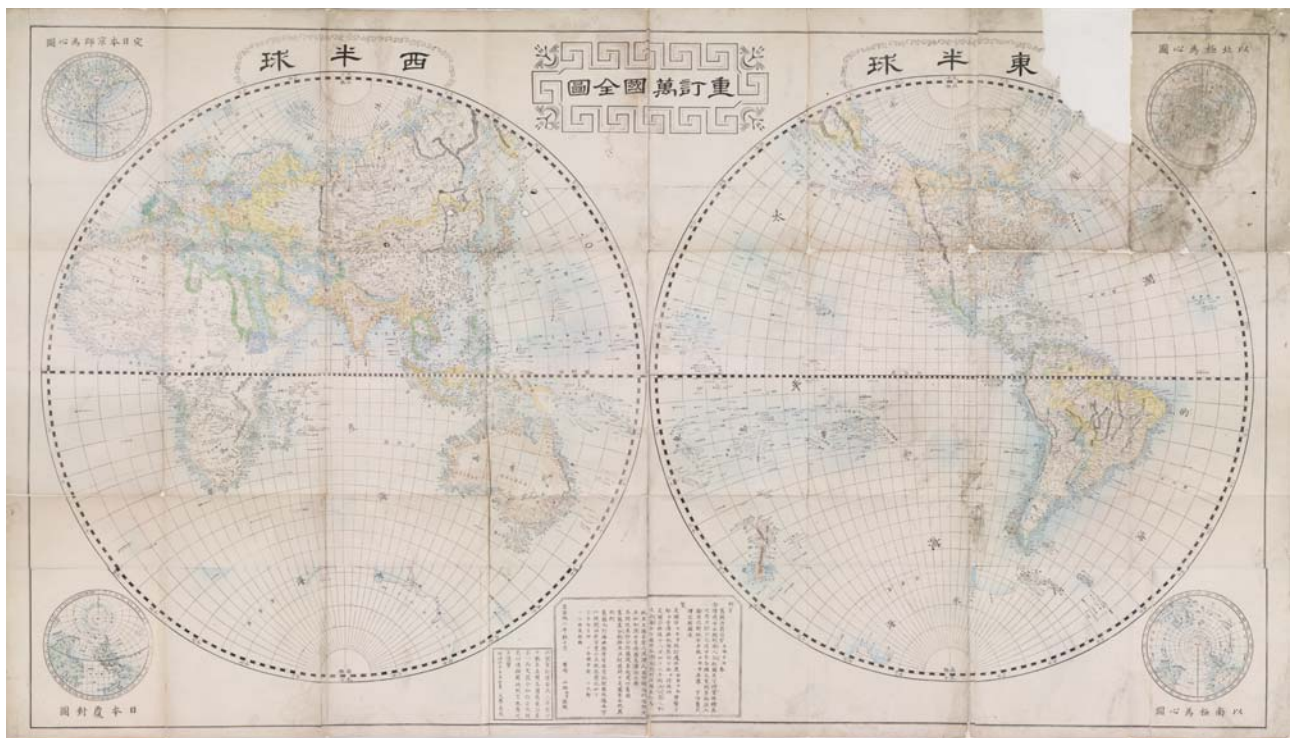


2-9 蝦夷国全図 林子平

* 天明6（1786）年に刊行された林子平の『三国通覧図説』の付図5枚の中の一つ。寛政4（1792）年に『三国通覧図説』は絶版となったが、付図は模写されたものが比較的多く残っている。



2-10 蝦夷圖境輿地全図 藤田良 播磨屋勝五郎 嘉永7（1854）年



2-11 重訂万国全図 山路諧孝 大学南校 明治4（1871）年

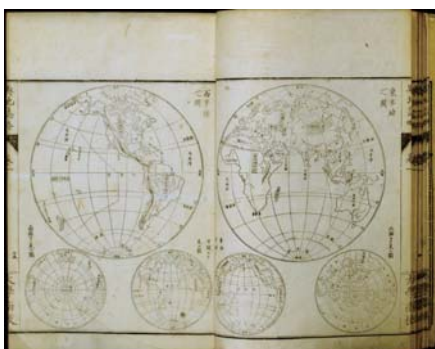
* 1846年に出版されたゲルマニア人の率（ソル）と半毒（ハントトゲ）の合作図を元とし、フランス・イギリス・オランダで出版された地図も参考とした旨の記述がある。安政2年版との主な相違点は、地名等の訂正と検索の便のための世界諸国の色わけの工夫であり、また安政2年版は木版筆彩であったが、明治4年版は木版色刷である。



（参考）K. Sohr：Vollständiger Hand-Atlas der neueren Erdbeschreibung über alle Theile der Erde, 1847

（重訂万国全図が参考とした K.Sohr und F.Handtke：Universal-Handatlas, 1846 の改訂版

右は本図の日本付近を拡大したもので朝鮮半島の形に特徴がある）



2-12 輿地誌略 内田正雄 大学南校 明治4（1871）年

* 大学南校は、西洋の社会・人文諸学を分担する構想のもとに明治2（1869）年に開設された。東京大学の前身校の一つ。

江戸幕府の天文方に淵源を持ち、蕃書調所→洋書調所→開成所→開成学校→大学南校という変遷をたどった。本書は大学南校から刊行された明治初期の大ベストセラーとなった世界地誌書。

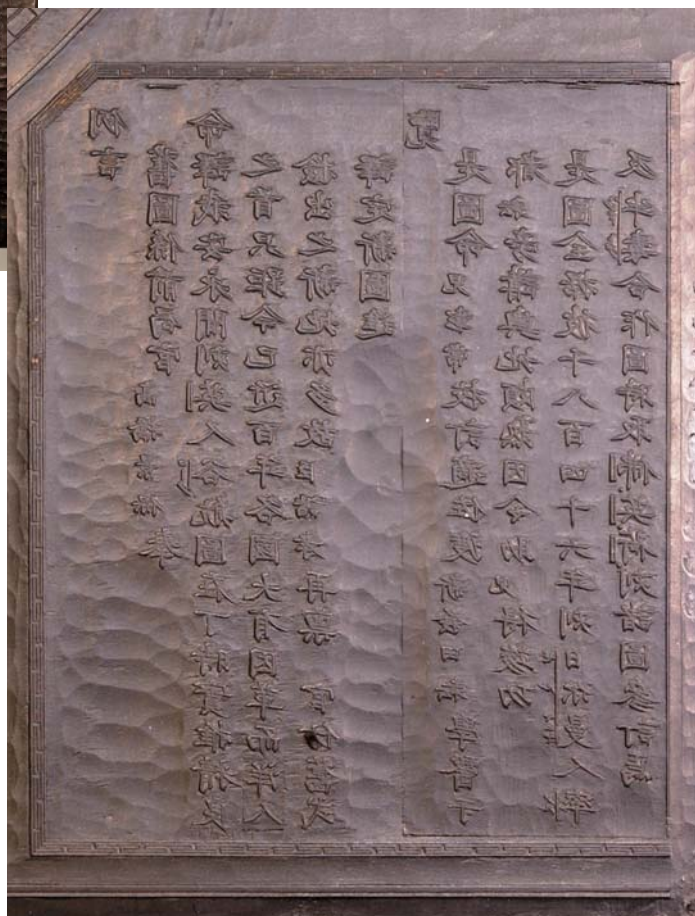
2-13 重訂万国全図版木 大学南校 明治4（1871）年



▲版木(部分)



▲「領曆所」(収納箱の側面)



▶埋め木の部分

*例言の部分である。写真の右半分（五行分）、および左から四行目の最後の2文字（「夷等」→「洋人」）が埋め木されている。



◀収納されていた箱と箱書き

「四箱之内」
「万国全圖版」
「東球之左四版」

▼版木のクリーニングの様子



第3部 日本？ 日本！

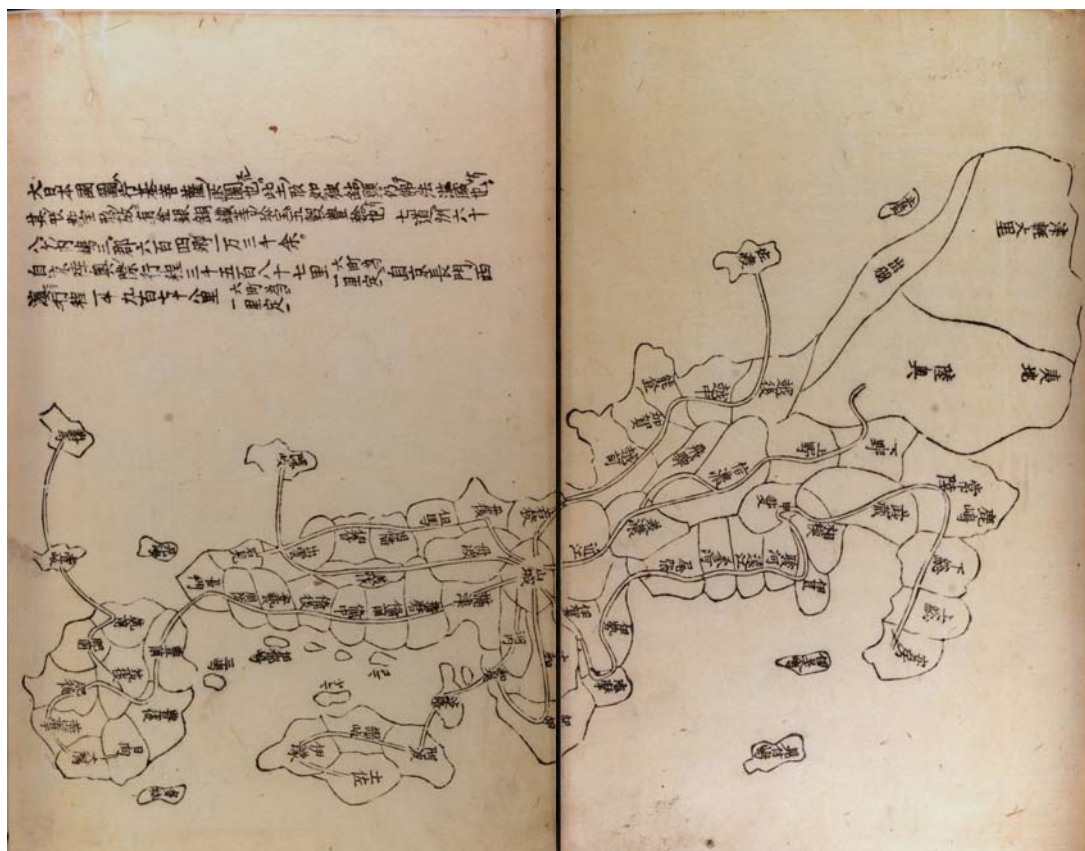


現在では衛星写真によって、日本の形はもちろん、地表の様子さえも詳細に観察することができるが、むかしの人々は、それぞれの時代によって、日本の形を様々に表現してきた。それでは、それらはどんな形だったのだろうか。

日本最初の全国図（日本図）とされているものは、奈良時代の僧・行基が作ったとされる「行基図」である。この行基図は、山城国を中心に街道を引き、そこへ丸みをおびた形の国を並べるもので、形としては正確ではないが、それぞれの国の位置関係を知ることができる。また、近年の研究では、中世の宗教思想が生み出した国土意識を表すものであるという指摘もある。

江戸時代に入ると、この行基図にとってかわる形で浮世絵師の石川流宣^{いしかわのり}が製作した「流宣図」^{りゅうせんず}が人気を博し、さらに地理学者・長久保赤水の「赤水図」が人気を得たが、これらの日本図を時代を追って見ていくと、日本の形の変容がよくわかる。

また、同様に西洋で刊行された地図から日本を描いた部分を時代を追ってピックアップして見ていくと、日本で作成された地図よりも、さらに一層その変化が激しいが、行基図等の日本で作成された地図が、逆に西洋に影響を与えていることをうかがわせる描写もあり興味深い。



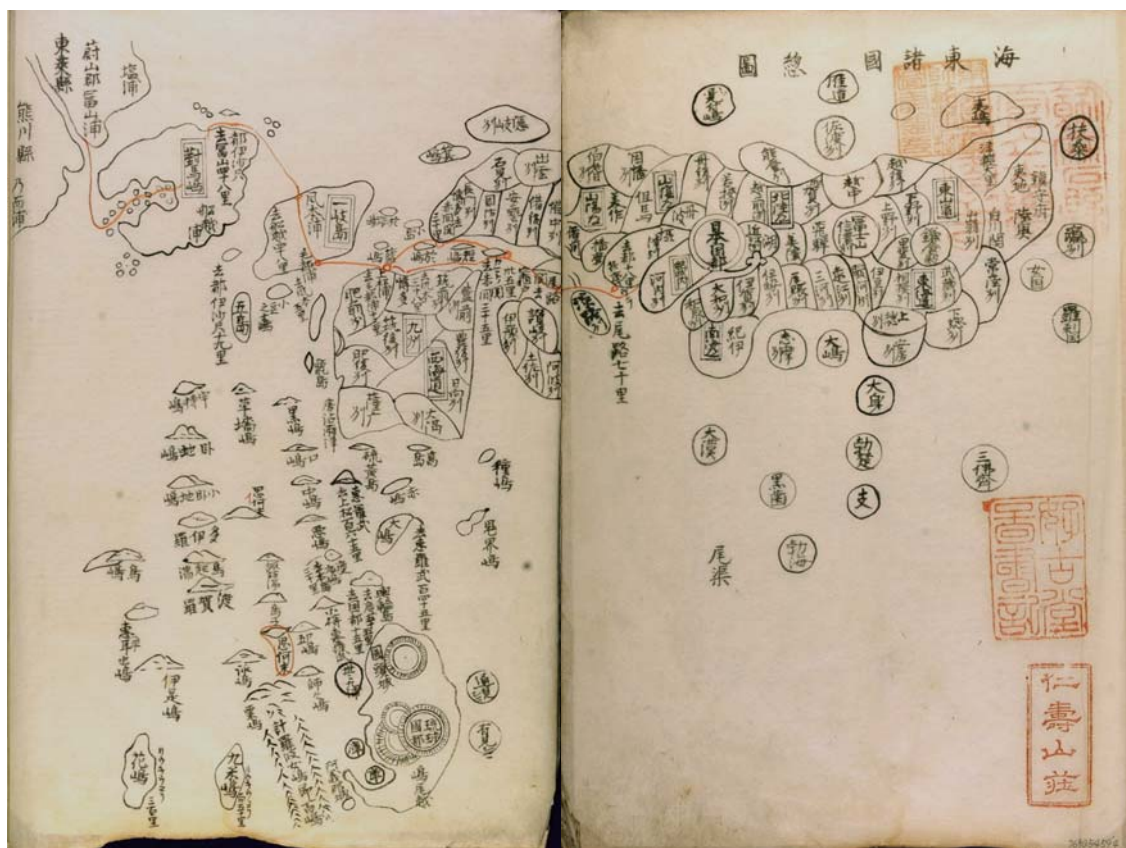
3-1 行基図（『拾芥抄』より 村上勘兵衛 明暦2（1656）年 2枚の画像を合成したもの）

* 左上に「大日本国図は行基菩薩の図する所也」で始まる記述がある。



3-2 唐土訓蒙図彙 平住専菴 河内屋太助ほか 享和2(1802)年
 *本書は絵入り百科事典である『訓蒙図彙』の形態をまね、唐土の知識を取り入れて作成したものであるが、地図に関してはリッチ系世界図の知識がベースになっている。

▲同書から日本の部分

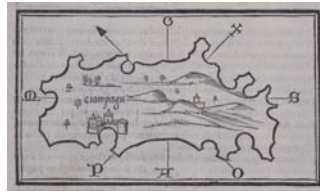


3-3 海東諸国紀 申叔舟
 *本書は写本であるが、『海東諸国紀』は朝鮮の申叔舟の著作で、1471年頃刊行された。本州は行基図系の描き方であるが、朝鮮と地理的に近く、古くから関係も深い九州や壱岐、対馬、琉球等については、独自の情報が付加され、記述が詳しくなっている。

西洋古版日本地図にみる様々な日本の形の変遷（放送大学附属図書館所蔵資料より）



① 1525



② 1534 (原図 1528)
ボルドーネ「日本島図」



③ 1570



④ 1573 (原図 1570)



⑤ 1595 (原図 1570)



⑥ 1589

*①、③～⑥の図は以下の各図から日本の部分を切り出している。また、③～⑤は1570年に刊行されたオルテリウスの世界地図帳『地球の舞台』に収録されており、⑥は同じく1589年の『地球の舞台』増補版第4巻に収録されている。



① プトレマイオス「インド図」



③ オルテリウス「アジア図」



④ オルテリウス「東インド図」



⑤ オルテリウス「韃靼図」



⑥ オルテリウス「太平洋図」



⑦ 1595



⑧ 1646



⑨ 1715

- ⑦オルテリウス／ティセラ「日本島図」 1595（＊行基図系）
- ⑧カルディム「新詳細日本図」 1646
- ⑨レランド「66の地域に区分された日本図」 1715（＊行基図系）
- ⑩ケンペル「68州に分けられた日本図」 1727（＊流宣図系）
- ⑪ダンヴィル「中国、スマトラ島および 日本列島を含むアジア図」 1752
- ⑫シーボルト「日本とその近隣・保護諸国図」 1832
（原図は高橋景保「日本辺海略図」 1809）



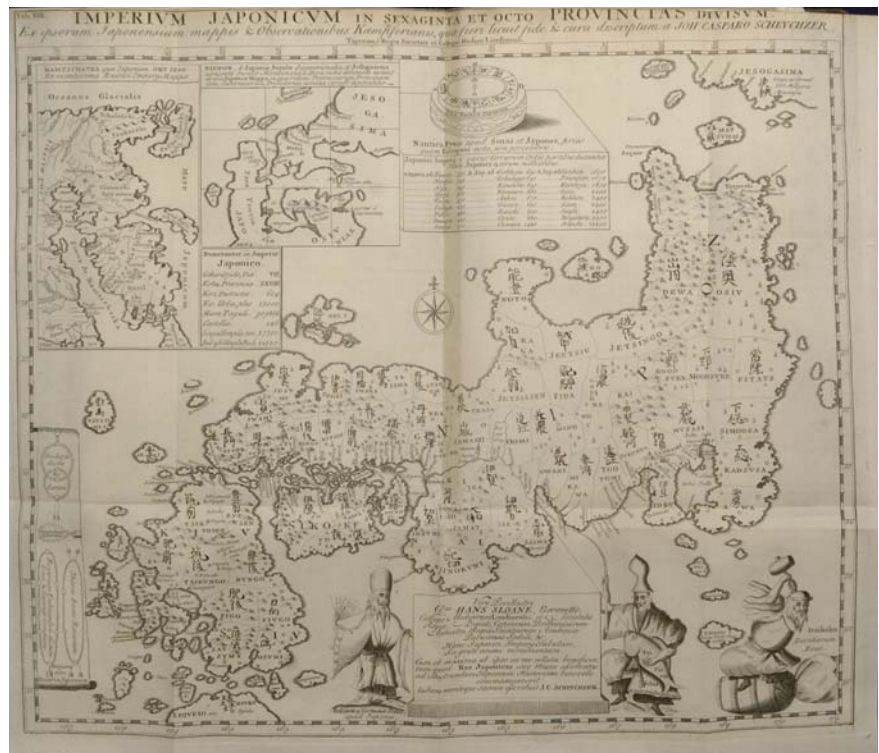
⑩ 1727



⑪ 1752



⑫ 1832



3-4 Engelbert Kaempfer : The history of Japan, London, 1728

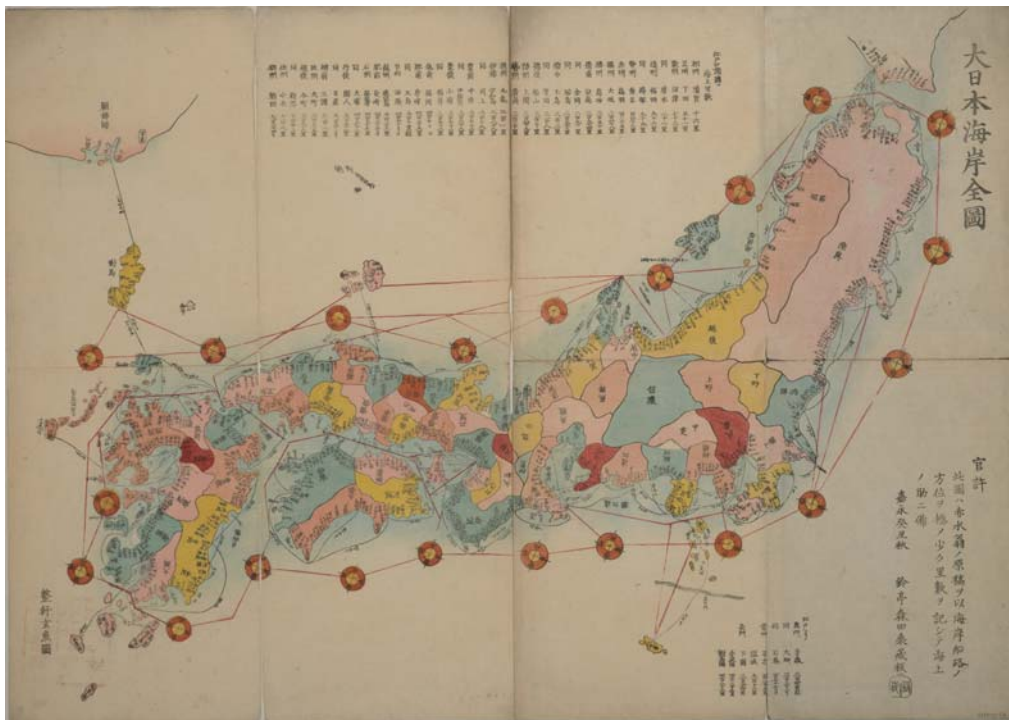
＊ケンペル(1651～1716)の『日本誌』(展示品は本学所蔵の貴重書、1728年ロンドン版)の挿図で、上図⑩と同じもの。彩色はない。



3-5 日本図 石川流宣画 相模屋太兵衛 元禄7（1694）年



3-6 日本鹿子 石川流宣画 佐藤四郎右衛門ほか 元禄4（1691）年



3-7 大日本海岸全図 整軒玄魚 鈴亭森田桑蔵板 嘉永6（1853）年

*「赤水翁ノ原稿ヲ以」の文言があり、長久保赤水の『改正日本輿地路程全図』（安永8・1779年）の系譜（赤水図）を引くものである。なお、本来右上部に張出し図として「蝦夷国」図が貼付されていたが、本図では脱落している。



3-8 官板実測日本地図（伊能忠敬作成）開成所 慶応3（1867）年

*本図は、伊能忠敬が作成した実測日本図『大日本沿海輿地全図』（文政4・1821年）の小図（いわゆる「伊能小図」）をもとに、幕府開成所から発行されたもの（官板）。「畿内 東海 東山 北陸」「山陰 山陽 南海 西海」「蝦夷諸島」「北蝦夷」の4舗からなる。このうち「蝦夷諸島」の図は、伊能忠敬と間宮林蔵の測量結果にもとづいて描かれたものであり、沿岸部のみならず内陸部にも詳細な地名が記載されているが、これは安政6（1859）年に刊行された松浦武四郎の『東西蝦夷山川地理取調図』によっている。我が国初の実測による刊行日本図である。

第4部 古地図ア・ラ・カルト



江戸時代の常陸国・下総国からは、著名な地理学者・探検家が生まれている。赤水図の長久保赤水（1717～1801）は常陸国多賀郡赤浜村（現在の茨城県高萩市）の生まれであり、伊能図の伊能忠敬（1745～1818）は下総国香取郡佐原村（現在の千葉県香取市佐原）の商人であったが、この他にも注目すべき人物を輩出している。ここでは、それらの中から3人の人物を紹介し、あわせて地図ではない一般の書物の版木を参考として展示する。

間宮林蔵（1775～1844）：常陸国筑波郡上平柳村（旧伊奈町・現在の茨城県つくばみらい市）の生まれ。文化5（1808）年から6（1809）年にかけて、2度の北方探検を行い、樺太が島であることを確認した人物として知られている。後にシーボルトが樺太・大陸間の海峡を間宮海峡と名づけ、世界に紹介した。



4-1 北蝦夷図説 間宮倫宗（林蔵）口述 播磨屋勝五郎 安政2（1855）年



4-2 東韃地方紀行 間宮林蔵口述

* 4-1、4-2 とともに、北方探検の結果を林蔵が幕府に報告書として献上した書物が流布したもの。

山村才助（1770～1807）：土浦藩士として江戸に生まれる。寛政元（1789）年に大槻玄沢に入門し蘭学を学ぶ。主著である『訂正増訳采覧異言』は、新井白石の『采覧異言』（写本でのみ伝来、1725年成立、流布本は1733年に桂川元廉が整理したもの）を訂正増訳したもので享和2（1802）年に完成。本文12冊、図1冊の13冊からなる原著の10倍ほどの大著で、内容的にも白石の天動説による説明を訂正して地動説によって天体構造を解説するなど面目を一新し、江戸時代最高の地理書といわれている。文化元（1804）年には幕府に献上され、幕命で『魯西亜国志』をまとめたが、若くして亡くなった。



4-3 訂正増訳采覧異言 山村才助 安政3（1856）年写

*「亜細亞洲東方 日本 支那 韓 諸国図」

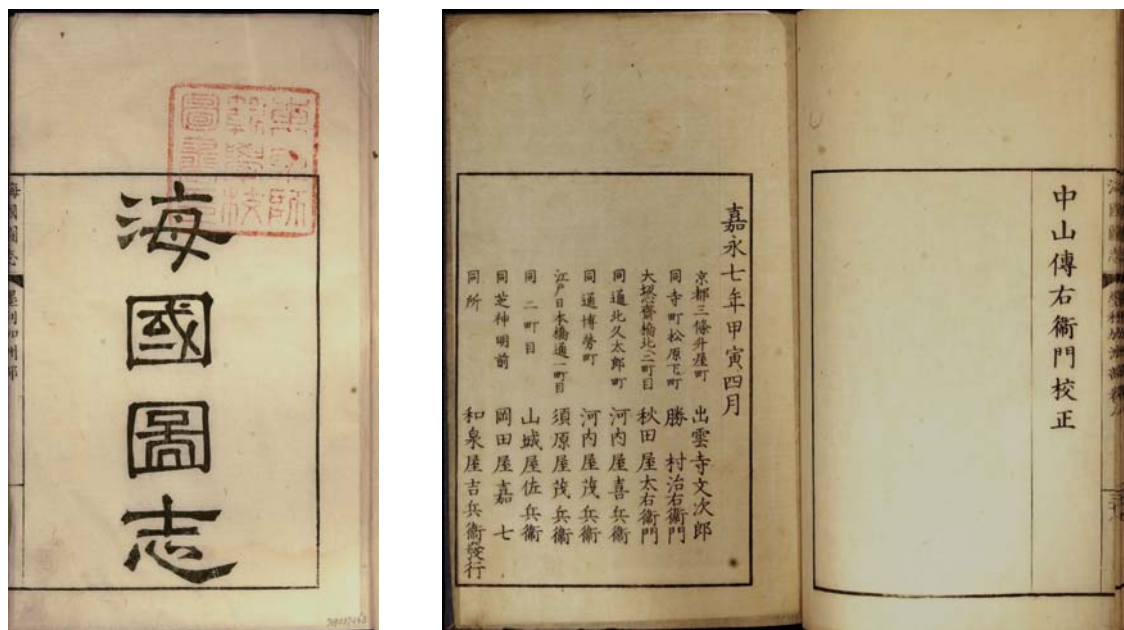


*同書より「南亜墨利加洲輿地図」

中山元成（1818～1892）：下総国猿島郡辺田村（旧岩井市・現在の茨城県坂東市）の豪農・素封家。通称は伝右衛門・士美・蘭華・朝陽道人などとも号した。安政6(1859)年横浜開港後にいち早く猿島茶をアメリカに輸出した人物として知られている。嘉永7（1854）年に魏源の『海国図志墨利加洲部』に訓点を付して翻刻出版し、その付図として『海国図志弥利堅国図』を刊行した。これは単行のアメリカ図としては江戸時代唯一のものである。また『海国図志』原本にはない図なので、西洋の地図等を参考にしながら独自に作成したものと考えられる。なお、南を上にしたのは、右開きの書籍に馴染んでいる日本人にとって、太平洋岸が最初に眼に入るようにとの配慮であるとも言われている。

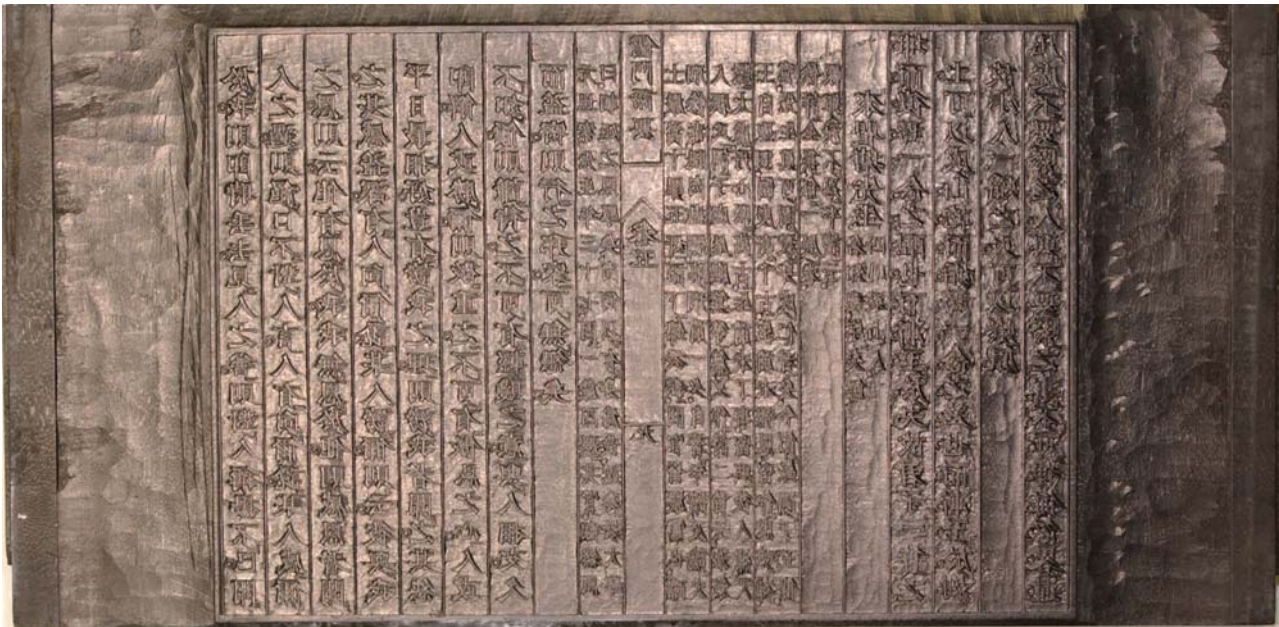


4-4 海国図志弥利堅国図 中山元成 嘉永7（1854）年

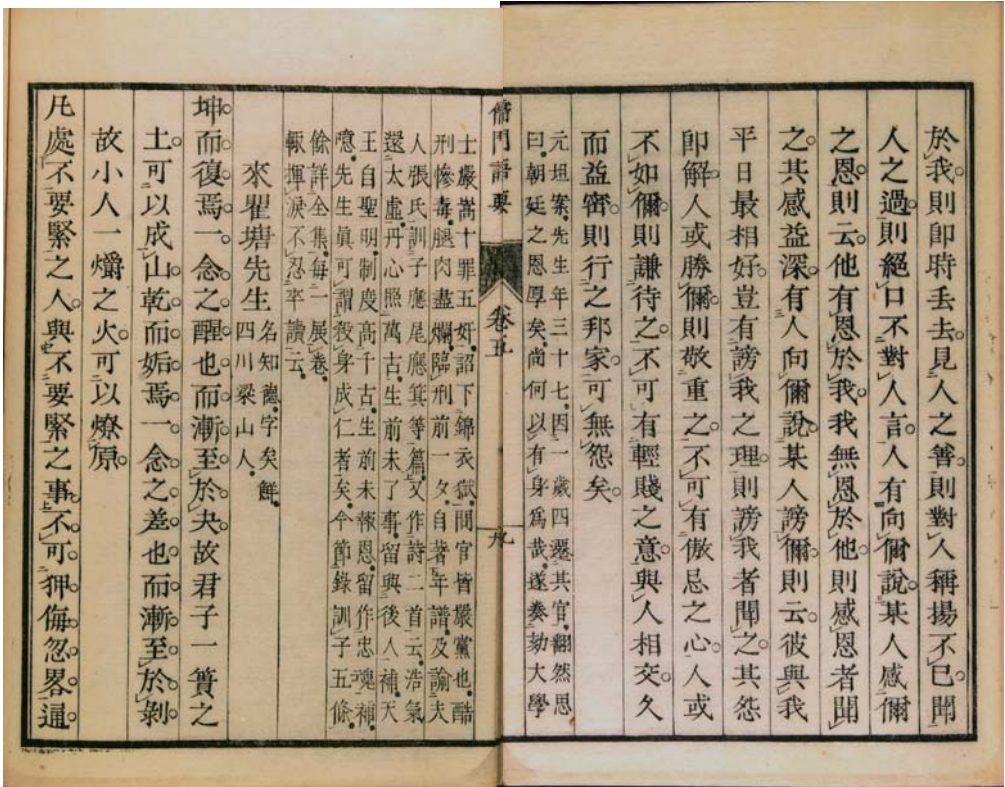


4-5 海国図志墨利加洲部 中山伝右衛門校正 和泉屋吉兵衛ほか 嘉永7（1854）年

版木は江戸時代の浮世絵や書物の出版において必要不可欠なもので、版元にとって最も貴重な財産であった。書物の版木の場合、板の反りを防ぐ意味もあって両面を彫ったものが多いが、表裏に各一丁ずつを彫った二丁掛けのもののほか、長板に各二丁ずつを彫ったもの、あるいは各三丁ずつを彫ったものもある。中国では梓を版木に用いたことから「上梓」という言葉が生まれたが、日本では山桜が最もよいとされてきた。



4-6 儒門語要版木



4-7 儒門語要 河内屋茂兵衛ほか 慶応元（1865）年
＊版木と同じ部分を掲出。

企画

筑波大学附属図書館

植松貞夫（館長）

木越英夫（副館長・研究開発室長）

田中成直（副館長）

附属図書館研究開発室

大塚秀明（大学院人文社会科学研究科准教授）

資料提供

放送大学附属図書館

篠塚富士男

展示協力

大学院人間総合科学研究科世界文化遺産学専攻

附属図書館企画展ワーキング・グループ

篠塚富士男（主査）

岡部幸祐

奥村洋子

落合厚子

金成真由子

中山知士

平田完

峯岸由美

特別講演会「東アジアと世界地図」

平成 19 年 10 月 7 日（日） 13:30 ～ 15:30

講師 大塚秀明（大学院人文社会科学研究科准教授）

電子展示 Web ページ

<http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/>

平成 19 年度 筑波大学附属図書館企画展

古地図の世界 —世界図とその版本—

平成 19 年 10 月 1 日 発行

発行 筑波大学附属図書館 ©2007

〒 305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1

TEL 029-853-2376

印刷 前田印刷株式会社



筑波大学
University of Tsukuba

